

GERMAN SELF-PROPELLED HEAVY ANTI-TANK GUN NASHORN

ドイツ 重対戦車自走砲 ナースホルン

解説: 齋木 伸生



■ナースホルンの開発

1941年6月22日、バルバロッサ作戦によってソ連に奇襲侵攻したドイツ軍は、彼らの眼前に出現したT34中戦車やKV重戦車といった、予想だにしなかった強力なソ連戦車の出現に驚愕させられます。いわゆるT34ショックです。ドイツ軍では自軍の装備する戦車の劣勢を挽回するため、後にパンサーとなる新型戦車の開発が開始されました。一方で既存の戦車、突撃砲の武装強化や、旧式化したII号戦車や38(t)戦車等の車体を改造した、対戦車自走砲の開発が進められることとなります。

当時ドイツ軍最強の対戦車砲といえば、対戦車砲ならぬ8.8cm対空砲Flak18および36でした。同砲は機動性に優れ、初めから対地射撃に用いることも考慮されており、徹甲弾により強大な装甲貫徹力を有していました。フランスや北アフリカで名将ロンメルが英軍のマチルダ歩兵戦車を撃ち取ったことはあまりにも有名ですし、またバルバロッサ作戦緒戦ではリトアニアで街道上に立ちはだかったKV-2を撃破しています。しかし、もともとが対空砲である関係で、地上高が高くまた展開に時間がかかりました。

1942年6月半ば、ヒトラーは開発中だった8.8cm対空砲Flak41をベースとした対戦車砲の開発を命じました。こうして開発されることになったのが、8.8cm対戦車砲Pak43でした。ヒトラーはこの強力な対戦車砲を自走化することを考え、7月23日から25日にかけて行われたシュペーア軍需相を交えた会議で、8.8cm対戦車砲Pak43を搭載した対戦車自走砲の開発を命じました。

このとき同時に15cm重榴弾砲sFH18を搭載する自走砲の開発も命じられており、前者はナースホルン(サイ)、後者はフンメル(マルハナ蜂)として生産されることとなります。なおナースホルンは当初は、フンメルと対になる形でホルニツェ(スズメ蜂)と呼ばれていましたが、1944年1月末のヒトラーの指示でナースホルンに改められました。これは、ヒトラーが対戦車自走砲が昆虫の名前であることを嫌ったためといわれています。

ナースホルンの開発にあたって問題となったのは、ベースとする車体をどうするかでした。開発期間を短縮するため既存の車体を使用されることになり、白羽の矢が立った

のが当時開発中だった「III/IV号車体」でした。これはもともと10.5cm軽野戦榴弾砲の搭載用に開発されたもので、III号、IV号ふたつの戦車のコンポーネントを流用して組み合わせて作られた新型車体でした。

10月2日、シュペーアから車体が間もなく開発完了することが伝えられると、ヒトラーは1943年5月12日までに100輛を完成させることを命じました。これはもちろん当時1943年夏に予定されていたクルスク攻勢への投入のためでした。軟鋼製の試作車体は10月末に完成し、生産初号車は1943年2月に引き渡されました。6月末までには155輛が生産され、クルスク攻勢までに100輛を完成させる目標はなんとか達成されました。ナースホルンはその後1945年3月まで生産が続けられ、総計439輛が完成しました。



■ナースホルンのメカニズム

ナースホルンの車体は、自走砲化のため戦車型の車体から完全に再設計されていました。前部には操縦室、中央部にはエンジン室が配置され、後部は車体を延長した上で、巨大な主砲を搭載して戦闘動作が行えるよう、広いスペースの戦闘室が設けられていました。戦闘室はオープントップで、周囲を薄い装甲板で囲んでいました。主砲は中央部のエンジン室上の台座に限定旋回式に搭載され、前部には防盾が取り付けられていました。

重量軽減のため各部の装甲厚は限定され、最も厚い車体

前面でも30mm、側面と後面は20mmとなっていました。さらに車体前面傾斜部と戦闘室全面は、10mmにすぎませんでした。車体前方左側には操縦手の頭を覆うように突出部が設けられていましたが、この部分の装甲厚も10mmしかありませんでした。これでは敵に攻撃されればひとたまりもありませんでしたが、それにより戦闘重量は24トンに抑えられ、路上での最大速度42km/hを発揮できました。

エンジンにはIV号戦車と同じマイバッハHL120TRMが搭載され、変速機にはIII号戦車と同じSSG77(前進6段後進1段)が搭載されました。足周りはおおよそ、IV号戦車と同じものとなっていました。転輪は小転輪が2個ずつリフスプリングで懸架され、上部には片側4個の支持輪が配置されています。これはIII号戦車がトーションバーサスペンションを用いているため、床板の位置が高くなる弊害を避けて、外装式サスペンションであるIV号戦車の転輪部を採用したのと思われます。また誘導輪もIV号戦車と同じで、履帯はIII号戦車とIV号戦車で共用された幅400mmのKgs61-400/120でした。しかし、起動輪だけはIII号戦車と同じものとなっていました。

主砲となったのは、71口径の超長砲身を誇る大戦中盤のドイツ軍最強の対戦車砲、8.8cm Pak43/1でした。この砲は、当初搭載を予定していたPak43の生産が遅延したことへの対策として、ラインメタル社が急速開発したPak43/41を車載化したものです。Pak43/41はPak43の砲身と砲弾が流用され、新設計の砲尾は水平鎖栓式で半自動薬莖排出装置が備えられていました。同じ8.8cm砲でも前述のように大戦緒戦からドイツ軍の切り札として使われ、タイガーIの主砲でもなった8.8cm対空砲は、56口径と砲身が短く威力も71口径の方がよく優れていました。

ナースホルンの8.8cm砲Pak43/1は長砲身で威力がはるかに大きい傑作砲で、その性能は通常の徹甲弾Pzgr39-1を使用して、距離100mで203mm(30度傾斜、以下同じ)、500mで185mm、1,000mで165mm、2,000mで132mm、高速徹甲弾Pzgr40/43では、100mで237mm、500mで217mm、1,000mで193mm、2,000mでさえ153mmという驚異的なものでした。

ただし高速徹甲弾は弾芯に希少金属のタンゲステンを使用していたため、ごく少数しか供給されませんでした。それに高速徹甲弾は、距離が遠くなると風の影響を受けやすく命中率が低下しました。もっともこれだけの装甲貫徹力であれば、高速徹甲弾であろうがなかろうが、ソ連軍のどんな戦車も遠距離から容易にその装甲を貫徹することができたのです。まさに無敵の攻撃力といえるでしょう。

なお、重駆逐戦車のフェルディナント/エレファントにも装備され、さらにはキングタイガー、ヤークトパンサーといった巨獣達の主砲となったPak43(戦車用はKwk43)は、砲身が共通ですが垂直鎖栓式で撃発装置なども異なっていました。

■部隊配備と戦歴

1943年1月26日、ナースホルンの最初の中隊編成に関する戦力指標が制定されました。中隊はナースホルン10輦と指揮型ナースホルン1輦から編成されるものとされていました。このときはまだナースホルンは、中隊単位で各機甲師団に配属するよう考えられていました。しかし、その後ナースホルンの運用方針が変更され、軍または軍団直轄で独立運用される重戦車駆逐大隊に配属されることとされました。

これを受けて3月25日には、ナースホルンを装備する最初の大隊である、第560重戦車駆逐大隊の編成が開始されました。続いて4月14日には第655重戦車駆逐大隊が、そして4月25日には第525重戦車駆逐大隊が新編されました。大隊は3個中隊から編成され、各々の中隊は14輦のナースホルンを装備していました。そして本部中隊には3輦が配備され、合計して45輦のナースホルンを装備するものとなっていました。

ナースホルンの初陣となったのは、東部戦線でのドイツ軍最後の戦略的攻勢作戦となった1943年7月のクルスク攻勢でした。このとき第560重戦車駆逐大隊は、第3機甲集団隷下のケンプ軍支隊、第42軍団に配属され、主攻部隊として前進する第4機甲軍の側面防御にあたり、その主砲の絶

大な威力でソ連戦車を痛撃しました。一方、第655重戦車駆逐大隊は中央軍集団に送られたものの、結局クルスク攻勢そのものには参加せず、その後は東部戦線を点々として防御戦闘にあたりました。

第525重戦車駆逐大隊は、クルスク攻勢に投入する当初の予定を変更してイタリアに送られることになりました。しかし、実際にはすぐにはイタリアには向かわず、フランスでの訓練が続けられました。実際にローマに移動したのは12月の途です。1944年1月には、カッシーノとネットゥーラを巡る戦闘に参加しています。その威力を示すものとして、M4シャーマンを2,800mの距離で撃破したことが伝えられています。

ナースホルンを装備する重戦車駆逐大隊の第二陣となったのが、第93、第519重戦車駆逐大隊で、それぞれ1943年8月1日と9月17日に編成されています。さらに続いて編成されたのが第88重戦車駆逐大隊で、12月3日に第88重戦車駆逐大隊から改編されています。これらの大隊の中でも、ナースホルンの戦歴の上で最大の功績を挙げたのが、ヴィテプスク防衛の立役者となった、第519重戦車駆逐大隊でしょう。

ヴィテプスクはベラルーシの要衝で、クルスクの戦いの後ドイツ軍を追撃するソ連軍は、1943年12月に攻撃を開始したのです。ソ連軍の攻撃は第14機甲擲弾兵師団の戦区に集中しました。第3機甲軍司令部は、ソ連軍の突破口を塞ぐべく、とっておきの予備兵力であった第519重戦車駆逐大隊を送り込んだのです。

このときの第1中隊第1小隊の小隊長が、後にヤークトタイガーを率いルーレク包囲陣で奮戦するアルバート・エルンスト少尉(当時)でした。エルンストは12月19日スースラハでソ連軍を撃退して以来、1944年3月までヴィテプスク周辺で激戦を戦い抜き最終的に65輦もの戦果を挙げたのです。エルンストはこの功績により、剣付柏葉騎士十字章を授与され、ヴィテプスクの防衛者として戦史に刻まれることとなります。

エルンストはその後他の部隊へ転属となりますが、第519重戦車駆逐大隊のヴィテプスク防衛の戦いは続きました。そこで新たなエースとなったのが、ルドヴィヒ・ナイグル軍曹(当時)でした。ナイグルは1943年8月にナースホルンの車長となり、11月には小隊長となりました。翌1944年6月23日ナイグルはドイツに帰還することとなりますが、まさにその日ヴィテプスクに対するソ連軍の攻勢が開始されたのです。

ナイグルは部隊に戻ると、ナースホルンを駆ってソ連軍に立ち向かいました。ナイグルのヴェジエンコヴィチヒでの戦いは、ナースホルンの戦いとしては異色のものでした。ここでナイグルは、殴り合いのような近接戦闘で多数のソ連戦車を撃破したのです。しかし、ナイグルのナースホルンも撃破され、彼は負傷して病院へかつぎ込まれました。その後彼はこの功績により、騎士十字章を授与され曹長に昇進しました。

その後、第519重戦車駆逐大隊はドイツに帰還し、残余の車体は第664重戦車駆逐大隊の1個中隊にまとめられました。その他にナースホルン装備で新編された大隊はなく、残余の部隊等から、第93重戦車駆逐中隊、第669重戦車駆逐中隊といった部隊が編成されています。圧倒的な攻撃力を誇るナースホルンは、ドイツ軍戦車駆逐部隊の重要な戦力として大戦終結まで戦い続けました。

■ナースホルン 緒元

- 全長：8,440mm、●全幅：2,950mm、●全高：2,940mm、
- 戦闘重量：24トン、●乗員：5名、
- エンジン：マイバッハHL120TRM 4ストロークV型12気筒液冷ガソリンエンジン
- 出力：265馬力/2600回転、300馬力/3000回転、
- 最大速度：42km/h、●航続距離：215km(路上)、
- 武装：8.8cmPak43/1対戦車砲×1、7.92mmMG34機関銃×1、●弾薬搭載数：40発、
- 装甲厚：車体前面下部30mm、側後面20mm、前上面10mm、戦闘室全周10mm

■ An Answer to the T-34

June 22nd, 1941 saw the commencement of Operation Barbarossa, with German forces streaming into the Soviet Union in massive numbers. When they found the overpowering Russian T-34 tank waiting for them, however, it became clear that a counter-measure was necessary. In July, Hitler ordered the development of a self-propelled anti-tank gun utilizing the 8.8cm Pak 43, a gun based upon the successful 8.8cm Flak 41 anti-aircraft weapon. The vehicle was originally developed under the name of Hornisse (hornet), but this was later dropped in favor of Nashorn (rhinoceros), reputedly due to Hitler's distaste for the use of an insect's name on a powerful weapon such as a self-propelled heavy anti-tank gun.

A base vehicle upon which to fit the Pak 43 was needed, but time was scarce: thus, it was decided to use the III/IV vehicle manufactured by Alkett, which extensively employed existing parts from the Panzer III and IV. In October 1942 Hitler ordered the production of 100 examples by May 1943, in time to join the fray at that summer's planned incursion in Kursk. In total, 439 Nashorns were produced, ending in March 1945.

■ Characteristics of the Nashorn

The Nashorn's body widely overhauled that of the III/IV. It featured a driver's compartment at the front, central engine room, and sizable yet only lightly armor-plated open top fighting compartment in the rear. The Pak 43 gun with mantlet was fixed on a base above the engine room; it featured limited rotation. Armor was limited due to weight constraints: 30mm in thickness on the hull front and 20mm on the rear and sides, with sloped front areas and the driver's seat cover receiving only 10mm.

The Maybach HL120TRM engine was married with a SSG77 transmission (6 forward gears, 1 reverse). The leaf spring suspension was largely inherited from the Panzer IV, and featured 4 independent return rollers on the top of either side of the tank.

Firepower was provided by the impressive 8.8cm Pak43/1 main gun. The potent modification of the Rheinmetall-made Pak 43/41 utilized a semi-automatic cartridge ejection mechanism and sliding breech block, and was also employed on the Elefant, Tiger II and Jagdpanther: using regulation armor-piercing Pzgr39-1 rounds, it could penetrate 165mm armor at 1 kilometer, and 132mm at 2 kilometers. It was capable of even greater destruction using high velocity armor piercing (HVAP) shells, but their use was deemed largely unnecessary due to its already-outstanding performance.

■ Deployment and Combat Use of the Nashorn

Although the original deployment plan of January 1943 called for independent units of at least 11 Nashorns to be deployed as a part of armored divisions, they were eventually assigned to heavy anti-tank battalions. The 560th, 655th and 525th Heavy Anti-Tank Battalions were formed in March and April 1943 in anticipation of the Nashorn's deployment; each received 45, with 14 Nashorns assigned to each of the battalion's 3 companies, plus a further 3 to the command company. The Nashorn quickly proved its value in live combat, causing havoc among Russian tanks in its maiden deployment, as a part of the 560th which provided cover for the flanks of the 4th Panzer Army in the 1943 German assault on Kursk. It is also said that in action with the 525th in the Battle of Monte Cassino, January 1944, a Nashorn destroyed an M4 Sherman from a range of 2,800 metres.

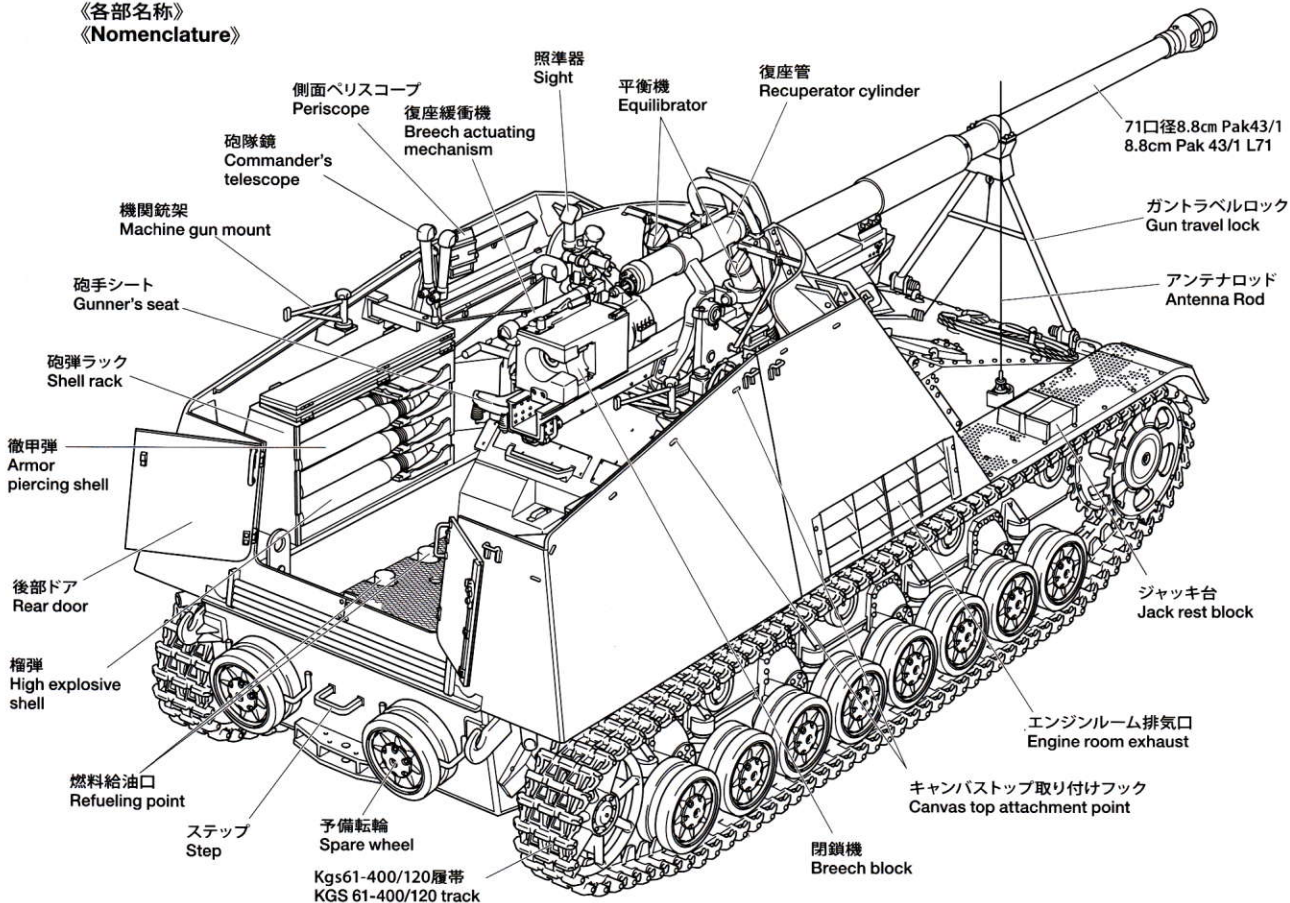
By the end of 1943, an additional 3 Heavy Anti-Tank Battalions – the 93rd, 519th and 88th – had been formed, and it was in the defense of Vitebsk, present-day Belarus that the Nashorn recorded its most famous exploits. The 519th was part of the force charged with holding what was a key location in the face of their westward-advancing Russian foes, and from December 1943 to March 1944, Commander of the 1st Platoon in the 1st Company, Lt. Albert Ernst, destroyed some 65 enemy tanks in the area. Ernst was later awarded the Knight's Cross for his actions. After the 519th returned to Germany, the remaining Nashorns were integrated into a single company in the 664th Heavy Anti-Tank Battalion, and no further new Nashorn battalions would be formed.

■ Nashorn Specifications

- Length: 8,440mm ● Width: 2,950mm ● Height: 2,940mm
- Fully-Loaded Weight: 24 tons ● Crew: 5
- Engine: Maybach HL120TRM liquid-cooled 4-stroke V12 gasoline engine
- Maximum Output: 265hp (at 2,600rpm) 300hp (at 3,000rpm)
- Maximum Speed: 42km/h ● Range: 215km
- Armament: 8.8cm Pak43/1 anti-tank gun x1, (40 rounds) 7.92mm MG34 machine gun x1
- Armor: 30mm (front lower hull) 20mm (rear sides) 10mm (front upper hull, fighting compartment)

《各部名称》

《Nomenclature》



■ Die Antwort auf den T-34

Am 22. Juni 1941 begann die Operation Barbarossa mit der die deutschen Streitkräfte mit starken Kräften in die Sowjetunion einbrachen. Als sie das erste Mal den russischen T-34 Panzer sahen wurde es klar, dass Gegenmaßnahmen nötig waren. Im Juli befahl Hitler die Entwicklung einer Selbstfahrlafette mit der 8,8 cm PAK 43, eine Waffe die auf der erfolgreichen 8,8 cm Flak 41 beruhte. Ursprünglich unter dem Namen Hornisse entwickelt wurde der Name nachher in Nashorn geändert; angeblich wegen der Aversion Hitlers für solch eine starke Waffe den Namen eines Insekts zu verwenden.

Daher wurde also ein Trägerfahrzeug für die PAK 43 gesucht aber die Zeiten waren schwierig. Es wurde daher beschlossen das Fahrzeug III/IV des Herstellers Alkett zu verwenden, welches in großem Umfang Teile des Panzers III und IV nutzte. Im Oktober 1942 befahl Hitler die Produktion von 100 Fahrzeugen bis Mai 1943. Er hatte die Absicht sie bei der Aktion im Sommer am Kursker Bogen zu verwenden. Insgesamt wurden 439 Nashorn produziert bis März 1945.

■ Besonderheiten des Nashorn

Die Wanne des Nashorn überholte diese des Panzers III und IV erheblich. Sie hatte einen Fahrerplatz vorne, einen zentralen Motorraum und hinten einen geräumigen, oben offenen Kampfraum mit leichtem Panzerschutz. Die PAK 43 Kanone mit der Rohrblende war auf einer Basis über dem Motorraum befestigt und hatte einen eingeschränkten Drehbereich. Der Schutz war aufgrund der Gewichtsprobleme beschränkt: 30mm am Bug und 20mm hinten und an den Seiten. Die angewinkelten Vorderteile und der Schutz für den Fahrer hatten nur 10mm.

Der Maybach HL120TRM Motor wurde mit einem SSG-77 Getriebe (sechs Vorwärtsgänge, ein Rückwärtsgang) verbunden. Die blatt-gefederte Aufhängung wurde weitgehend von Panzer IV übernommen und hatte vier Stützrollen auf jeder Seite des Panzers.

Die Feuerkraft kam von der eindrucksvollen 8,8 cm PAK 43/1 Hauptwaffe. Die erhebliche Verbesserung der PAK 43/41 von der Firma Rheinmetall hatte einen halb-automatischen Hülsenauswurf und einen horizontal öffnenden Verschlusskeil. Die Waffe wurde auch beim Elefant, Tiger II und Jagdpanther verwendet. Nach der Vorschrift für die Panzer-brechenden Granaten (Pzgr 39-1) konnten auf einen Kilometer 165mm Panzerstahl durchschlagen werden und bei zwei Kilometern immer noch 132mm. Die Nutzung der Hochgeschwindigkeitsmunition (HVAP) konnte noch viel mehr erreichen, wurde aber als nicht notwendig angesehen, da die Leistung bereits mehr als ausreichend war.

■ Une Réponse au T-34

Le 22 juin 1941 débuta l'Opération Barbarossa, des forces allemandes en grand nombre envahissant l'Union Soviétique. Elles y rencontrèrent le tank russe T-34 puissant et bien protégé, et la nécessité d'une arme capable de le contrer se fit évidente. En juillet, Hitler ordonna le développement d'un canon anti-char automoteur utilisant le PaK 43 de 88mm, développé sur la base du très réussi canon anti-aérien FlaK 41 de 88mm. Désigné à l'origine Hornisse (frelon), l'engin fut finalement baptisé Nashorn (rhinocéros), Hitler n'appréciant semble-t-il pas qu'on donne un nom d'insecte à une arme aussi puissante.

Il fallait trouver un véhicule sur lequel installer le PaK 43, mais le temps était compté ; il fut donc décidé d'utiliser le véhicule III/IV produit par Alkett qui employait des pièces existantes de Panzer III et IV. En octobre 1942, Hitler ordonna la production de 100 exemplaires avant mai 1943, à temps pour participer à l'offensive de Koursk prévue pour l'été. Au total 439 Nashorn furent construits jusque mars 1945.

■ Description du Nashorn

La caisse du Nashorn était celle entièrement révisée du III/IV. Elle comportait le poste de conduite à l'avant, au centre le moteur et à l'arrière un compartiment de combat ouvert spacieux mais seulement légèrement blindé. Le canon PaK 43 avec masque était fixé sur une base au-dessus du compartiment moteur ; son pointage en rotation était limité. Le blindage était réduit du fait de contraintes de poids : 30mm d'épaisseur à l'avant de la caisse et 20mm sur les côtés et l'arrière, les parties inclinées à l'avant et la protection du siège du conducteur n'étant épais que de 10mm.

Le moteur Maybach HL120TRM était associé à une transmission SSG77 (6 rapports avant, 1 arrière). La suspension était héritée du Panzer IV et comportait 4 galets de retour indépendants de chaque côté.

La puissance de feu était fournie par l'impressionnant canon 8.8cm PaK 43/1. Cette version modifiée du PaK 43/41 fabriqué par Rheinmetall comportait un système semi-automatique d'éjection des douilles et un bloc de culasse couissant. Il a également été monté sur les Elefant, Tiger II et Jagdpanther. Utilisant des obus perforants Pzgr39-1, il pouvait pénétrer 165mm de blindage à 1 kilomètre et 132mm à 2 kilomètres. Il avait un pouvoir encore plus destructeur avec des obus perforants à haute vitesse, mais l'utilisation de ces derniers n'était pas nécessaire du fait des

■ Auslieferung und Einsatz des Nashorn

Obwohl der ursprüngliche Entwicklungsplan aus dem Januar 1943 unabhängige Einheiten als Teil der mechanisierten Divisionen mit jeweils mindestens 11 Einheiten vorsah, wurden sie nachher den schweren Panzerjägerbataillonen zugewiesen. Im März und April 1943 wurden die schweren Panzerabwehrbataillone 560, 655 und 525 gebildet und mit der Auslieferung der Nashörner erhielten sie jeweils 45 Fahrzeuge. 14 Nashörner wurden jeweils in den drei Kompanien eingesetzt, drei weitere in der Staatskompanie. Das Nashorn bewies bald seinen Gefechtswert bei der Bekämpfung russischer Panzer. Der erste Einsatz erfolgte als Teil des sPzAbwBtl 560, welches in der Schlacht von Kursk die Flanken der 4. Panzerarmee abdeckte. Es gibt Berichte, dass ein Nashorn des sPzAbwBtl 525 im Januar 1944 einen M4 Sherman in der Schlacht von Monte Cassino auf eine Entfernung von 2800m zerstörte.

Zum Ende des Jahres 1943 wurden drei weitere schwere Panzerabwehrbataillone gebildet mit den Nummern 93, 519 und 88. Bei der Verteidigung von Vitebsk (heute Belarus) erreichte das Nashorn seine berühmtesten Erfolge. Das sPzAbwBtl 519 war Teil der Verteidigungskräfte und sollte die Position gegen die vordringenden russischen Streitkräfte halten. Der Zugführer des ersten Zuges der ersten Kompanie, Leutnant Albert Ernst, zerstörte von Dezember 1943 bis März 1944 65 Feindpanzer in dieser Gegend. Ernst erhielt später das Ritterkreuz für seine Aktion. Nachdem das sPzAbwBtl 519 nach Deutschland zurück gekehrt war wurden die verbliebenen Nashorn zu einer Kompanie des sPzAbwBtl 664 integriert und obwohl keine neuen Nashorn Bataillone gebildet wurden war die überlegene Feuerkraft ein wichtiger Bestandteil der deutschen Wehrmacht bis zum Ende des zweiten Weltkrieges.

Nashorn Technische Daten

- Länge: 8440mm ● Breite: 2950mm ● Höhe: 2940mm
- Gefechtsgewicht: 24 Tonnen, ● Besatzung: 5
- Motor: Maybach HL120TRM flüssigkeitsgekühlter V12 4-Takt Benzinmotor
- Maximale Leistung: 265hp (at 2600 U/min) 300hp (at 3000 U/min)
- Höchstgeschwindigkeit: 42km/h ● Reichweite: 215km
- Bewaffnung: 8.8cm PaK43/1 Panzerabwehrkanone x1 (40 Granaten) 7.92mm MG34 Maschinengewehr x1
- Panzerung: 30mm (vordere untere Wanne), 20mm (hintere Seitenteile), 10mm (vordere Oberwanne, Kampfraum)

performances déjà exceptionnelles avec des munitions standards.

■ Déploiement et Utilisation au Combat du Nashorn

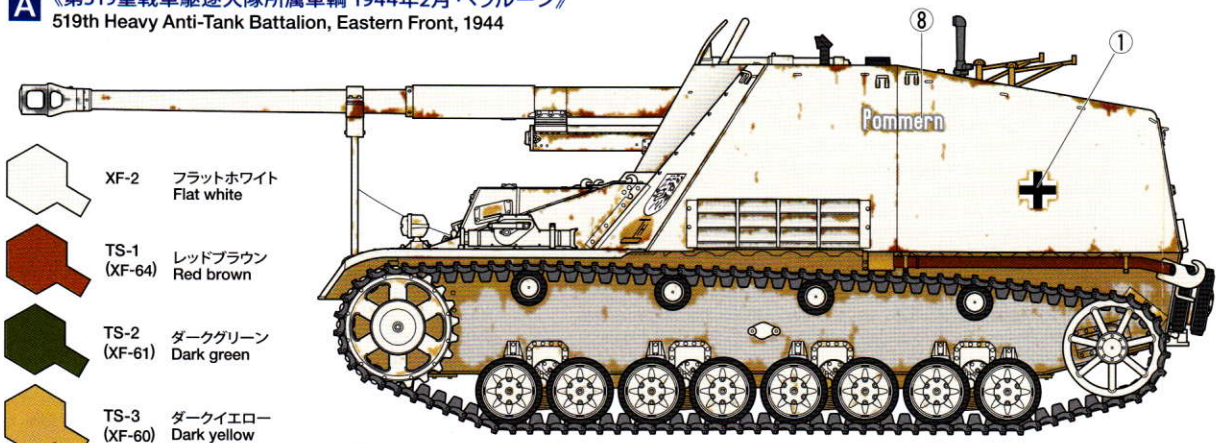
Bien que les plans de déploiement originaux de janvier 1943 prévoient des unités indépendantes de 11 engins assignées aux divisions blindées, les Nashorn furent confiés à des bataillons anti-chars lourds. Les 560^{ème}, 655^{ème} et 525^{ème} Bataillons Anti-Chars Lourds furent constitués en mars et avril 1943 en prévision du déploiement du Nashorn. Chacun reçut 45 engins, 14 dans chacune des 3 compagnies du bataillon et 3 dans la compagnie de commandement. Le Nashorn prouva très tôt sa valeur, harcelant les tanks russes lors de sa première action de combat quand une partie du 560^{ème} assura la couverture des flancs de la 4ème Armée Blindée durant la Bataille de Koursk. Il se dit qu'à la Bataille de Monte Cassino en janvier 1944, un Nashorn du 525^{ème} détruisit un M4 Sherman à une distance de 2.800 mètres.





Fin 1943, 3 bataillons anti-chars lourds supplémentaires, les 93^{ème}, 519^{ème} et 88^{ème} avaient été formés et c'est pendant la défense de Vitebsk (aujourd'hui en Biélorussie) que le Nashorn réalisa ses exploits les plus célèbres. Le 519^{ème} faisait partie des forces chargées de tenir une position clé face à l'avancée des troupes russes et de décembre 1943 à mars 1944, le commandant du 1er Peloton de la 1ère Compagnie, le Lt Albert Ernst, détruisit 65 chars ennemis dans le secteur. Il fut décoré de la Croix de Chevalier pour ces faits. Après le retour du 519^{ème} en Allemagne, ses Nashorn survivants furent amalgamés en une seule compagnie du 664^{ème} Bataillon Anti-Chars Lourds. Bien qu'aucune nouvelle unité de Nashorn ne soit constituée, leur puissance de feu fut utilisée par les forces allemandes jusqu'à la fin de la 2^{ème} G.M.

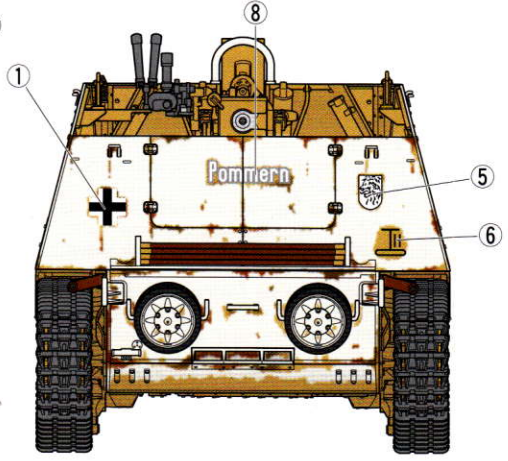
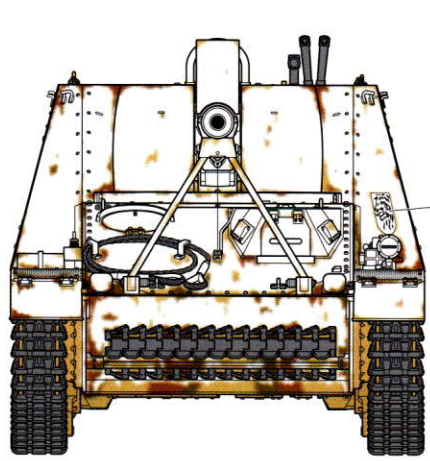
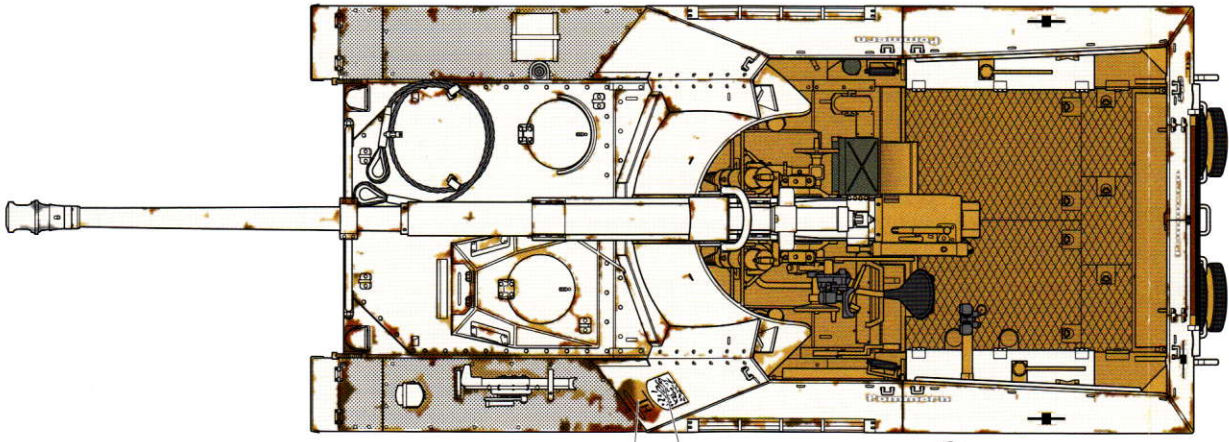
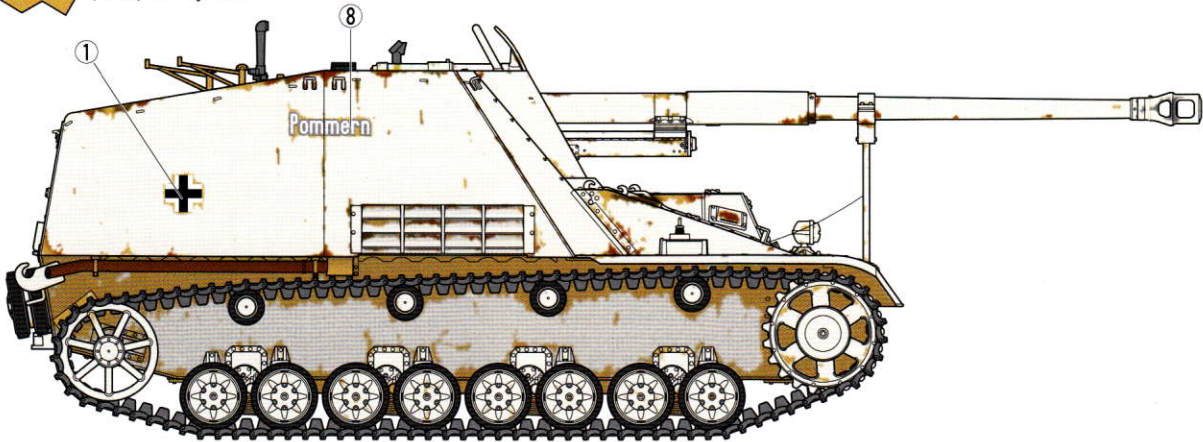
■ Caractéristiques du Nashorn

- Longueur: 8.440mm ● Largeur: 2.950mm ● Hauteur: 2.940mm
- Poids en Ordre de Combat: 24 tonnes ● Equipage: 5
- Moteur: Maybach HL120TRM V12 4 temps à essence refroidi par liquide
- Puissance Maximale: 265cv (à 2.600 trs/min.) 300cv (à 3.000 trs/min.)
- Vitesse Maximale: 42km/h ● Autonomie: 215km
- Armement: Canon anti-char 8.8cm PaK43/1 x1 (40 obus), mitrailleuse 7.92mm MG34 x1
- Blindage: 30mm (caisse inférieure avant), 20mm (côtés, arrière), 10mm (caisse supérieure avant, compartiment de combat)




A 《第519重戦車駆逐大隊所属車輛 1944年2月 ベラルーシ》
519th Heavy Anti-Tank Battalion, Eastern Front, 1944

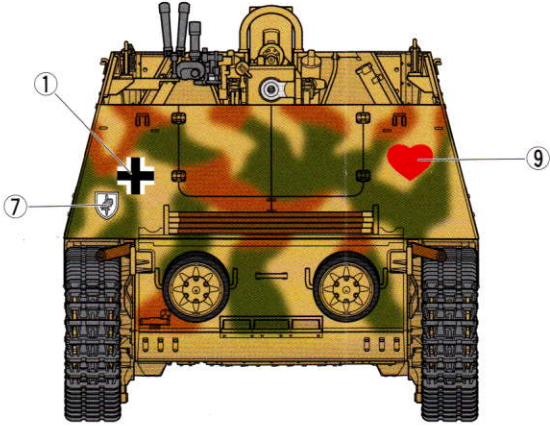
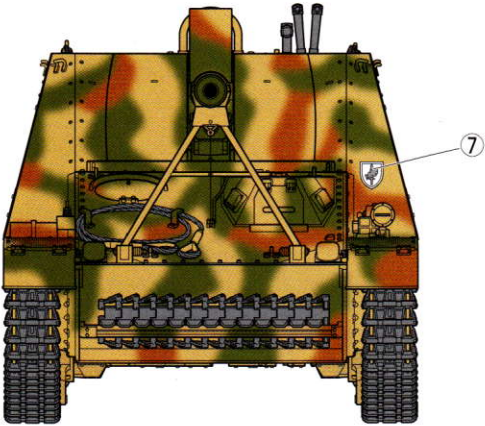
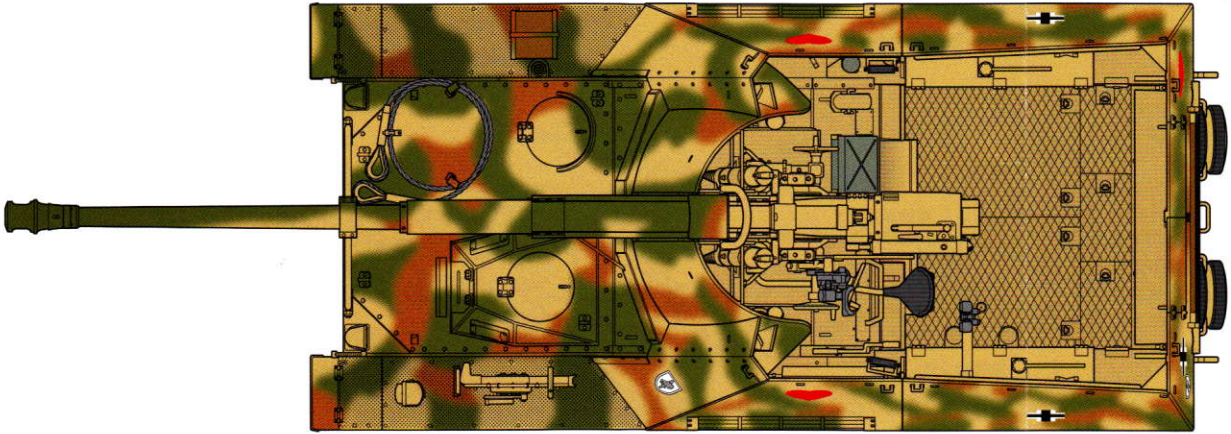
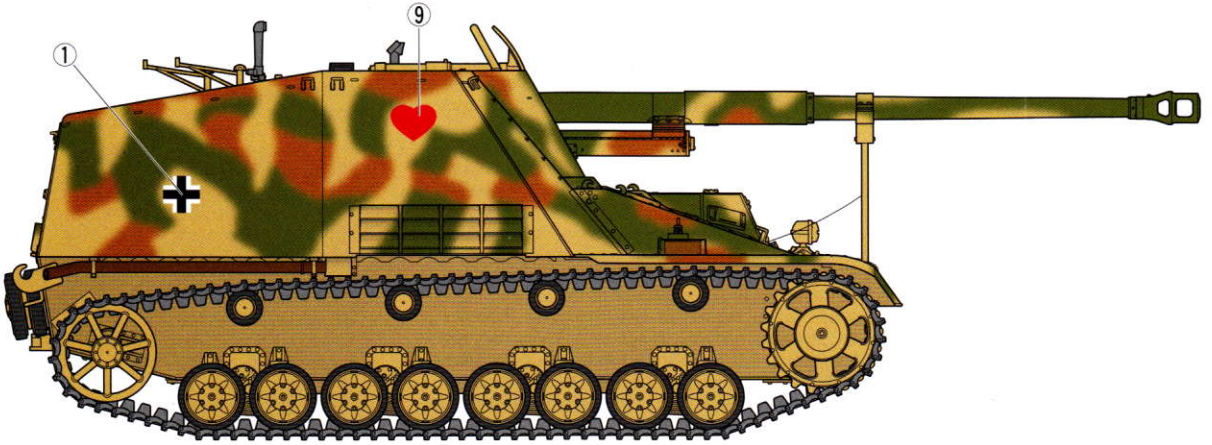
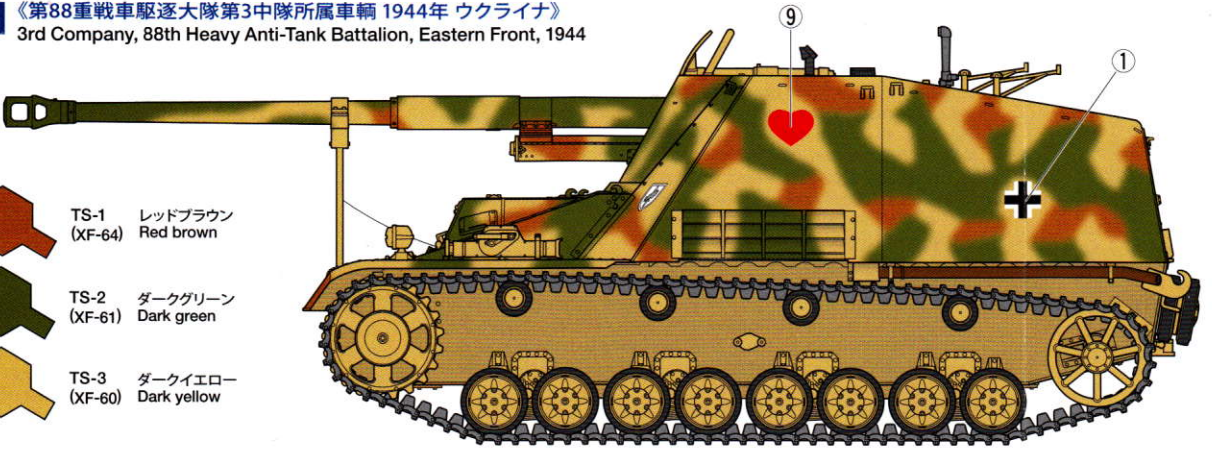


-  XF-2 フラットホワイト
Flat white
-  TS-1 レッドブラウン
(XF-64) Red brown
-  TS-2 ダークグリーン
(XF-61) Dark green
-  TS-3 ダークイエロー
(XF-60) Dark yellow





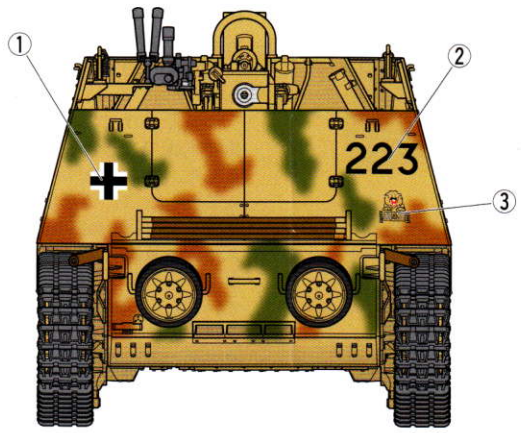
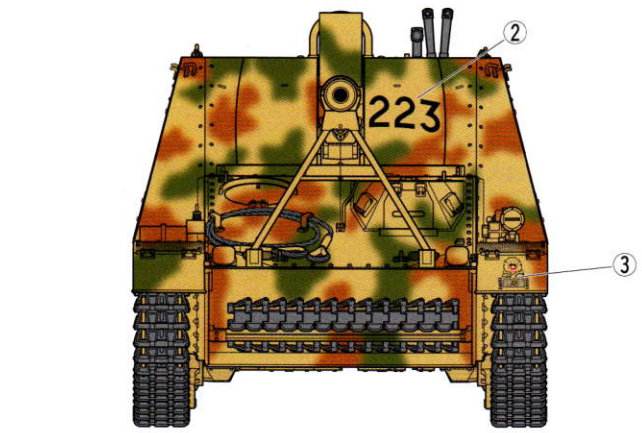
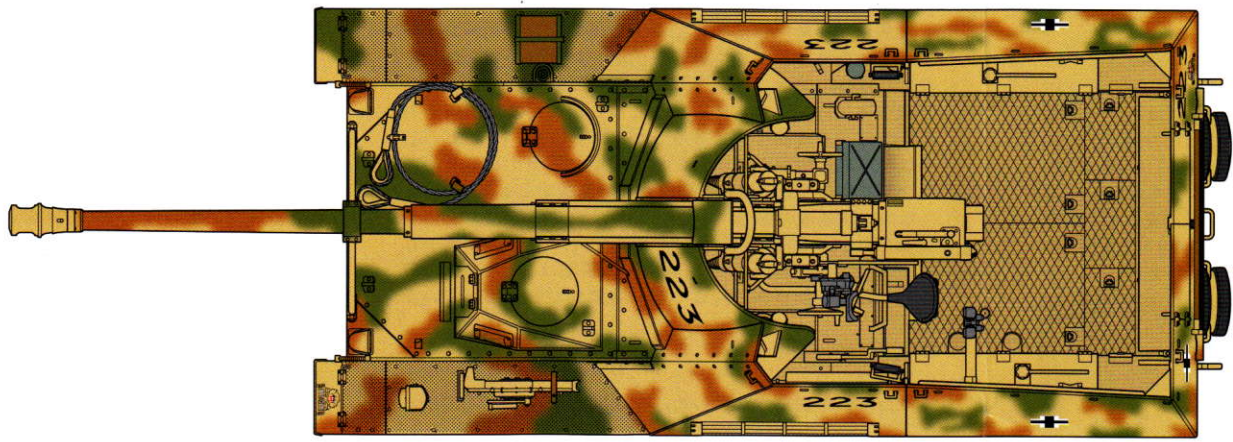
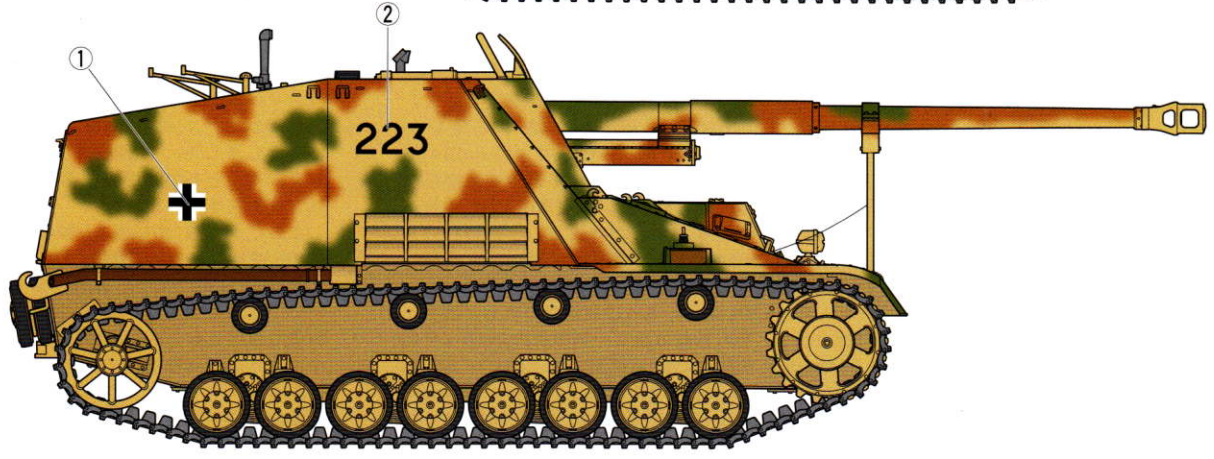
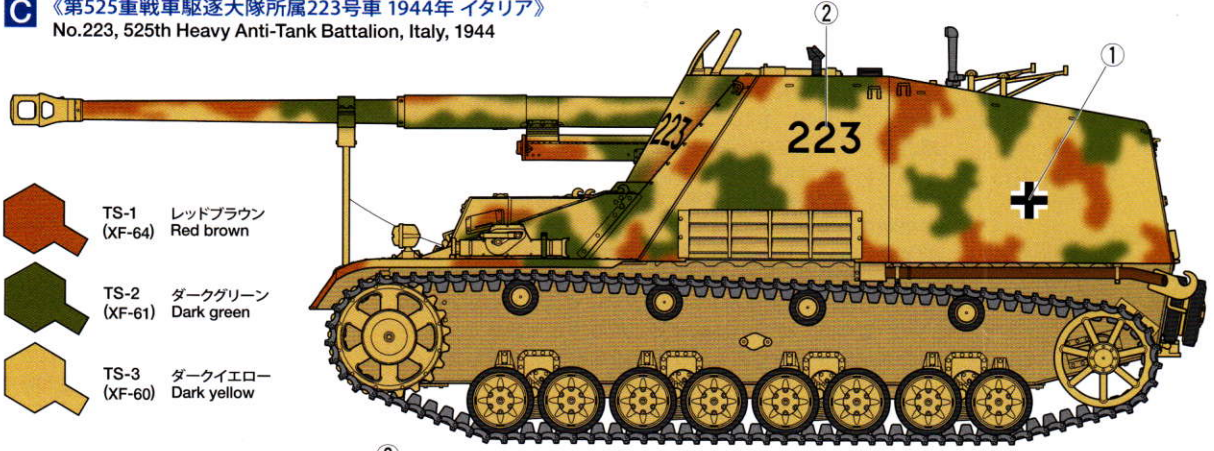
B 《第88重戦車駆逐大隊第3中隊所属車輛 1944年 ウクライナ》
 3rd Company, 88th Heavy Anti-Tank Battalion, Eastern Front, 1944

-  TS-1 レッドブラウン (XF-64) Red brown
-  TS-2 ダークグリーン (XF-61) Dark green
-  TS-3 ダークイエロー (XF-60) Dark yellow



《第525重戦車駆逐大隊所属223号車 1944年 イタリア》
 No.223, 525th Heavy Anti-Tank Battalion, Italy, 1944

-  TS-1 レッドブラウン (XF-64) Red brown
-  TS-2 ダークグリーン (XF-61) Dark green
-  TS-3 ダークイエロー (XF-60) Dark yellow





写真協力：クビンカ戦車博物館
 Pictures are courtesy of the Kubinka Tank Museum

《ウォーター・パターン迷彩》
 Water pattern camouflage

注意!
 CAUTION

★迷彩の雨模様に見える線はXF-61で表現してください。
 ★Use XF-61 to recreate fine line pattern which features throughout camouflage.



-  XF-65 ● フィールドグレイ / Field grey
-  XF-64 ● レッドブラウン / Red brown
-  XF-60 ● ダークイエロー / Dark yellow
-  XF-61 ● ダークグリーン / Dark green

